

「行った先々で君が見たとおりにせよ」

・・・お宅はどなた？・・・

現在は様々な機能を持った携帯電話の普及で、我が愛すべき固定電話はいささか陰が薄いが、私は、このしぶとく生き延びている、固定電話に限りなく愛着を持っている。それとともに、現代風若者流の携帯電話マナーに、いささか腹が立つことが多いせいか、通常の電話をかける時のマナーが気になってしまう。

相手に電話をかけた時、一般的にはまず、「誰々さん(のお宅)ですか？」と相手の立場に立って行動を開始し、次ぎに自分の名前を名乗るか、逆に自分の名前を名乗って、目的とする相手の所在を問い合わせるのが普通であろう。

こんなことは、大概の人が熟知しないまでも自然と行われると思う。しかし、中南米の場合ベルが鳴り受話器を取って、日本の「はい」あるいは、「もしもし」に相当する「アロー」と答えると（メキシコでは、ブエノ）、多くの場合、いきなり、「誰々につないで下さい」あるいは、「誰々おりますか」という。

これはまだ良いほうの部類に属する。当方のスペイン語の発音に、違和感を感じずのかどうか分からないが、「お宅はどなた？」と先ず切り出して来る人がいる。自分から電話をかけておきながら、自分の名前は絶対的と言って良いほど名乗らずに、いきなり、「お宅はどなた？」とは、失礼この上ないものだと思うのだが、このように思うのは、私だけだろうか。

真面目に、こちらの名前を言うとき次の質問は決っている。「おまえの電話は何番か？」である。この段階で



右側メキシコ電話会社の本社ビルの一部と、左側は小生が勤めている雑居ビル

間違いと分かると、10人のうち8人くらいは、謝りの言葉も何も言わずに、「ガチャン！」と電話を切ってしまう。後は、「ツー、ツー」の音が、受話器の中に侘しく残るだけである。

時には、さらに追い討ちをかけて、同じ人から再度かかってきて、同じ問答が繰り返される。

夜中の寝入りばなや、早朝の眠い時などに電話のベルがなると、過去の職業がなせることなのか、設備事故報告か苦情電話かなど、何か悪いことが起きたのではないかと瞬間的に連想してしまう。

「すわ何事か」と思って、眠い目をこすりながら急いで受話器をあげると、「お宅はどなた？」と間延びした声でやられると、とたんに倦怠感に襲われる。現在のボランティア活動の道を選択する為に、とうの昔に会社生活とおさらばしたのにもかかわらず、過去の仕事の習い性はなかなか抜けないものだ。

「お宅はどなた？」式の電話のかけ方については、

「うむ。なるほど、通信設備が完全でなかった時代に、何処へつながったか分からず、間違っかけてたのではないかと、相手を確認めたいと言う気持ちが先立ち、「お宅はどなた？」とばかり、まず相手を確認して、それからおもむろに話を始めたことの名残りかも知れない」



などと、過去に電気通信を生業としてきた者として好意的に解釈してしまう。

一方、年取って少々ひねてきた、現在のボラッチョ・ボニート氏の視点にたつて、解釈を付け加えるとすれば、根本的には民族的意識、言い換えれば自己意識にもとづくものだと思う。

すなわち、自分が相手に対して何者であるかを考えるより、相手が自分にとって何者であるかを知ろうとするのが先決とされている風に見える。

もっとも日本でも多いパターンに、

「俺だけだよ。○○ちゃんいる？」

などと、夜遅く街の喧噪をバックにいささか酩酊気味の声が、電話線を伝わってダイレクトに、受話口から耳に飛び込んで来ることもある。

「どちら様の俺ですか？」と一言嫌みも言いたくなるような、自慢できるマナーではないものも結構存在する。

これなどは前例とは逆に、目指す所へ間違いなく、電話がつながっていると言う思いが前提にあるのである。今回のタイトルには、

「**A la tierra que fueres, haz como vieres**」

(ア ラ テイエララ ケ フェレス アス コモ

ヴィエレス と発音し、直訳はタイトルの通りであるが、日本語の諺としては、郷に入りては郷に従えというところか)を使った。

最近では、日本人関係者以外に電話をかけるときは、この諺どおりに当地流になってしまい、日本へ帰ってからも続けてしまいそうで今から心配している。

いずれにしても、「自分自身のマナーを棚に上げて、人のことで何を言うか」などと、言われないように自分でも気をつけていこうと、テキーラの杯を重ねながら思うのであった。

(2010年2月1日、今月2月は3週連続で、メキシコ市近郷の産業都市、ケタロ市でそれぞれ別の工業系大学で、教官を相手に講義活動をする予定です)

「ちょっと休憩」

深夜、電話がなった。

「ちょっと待っててね。出てみるから」、モンロー婦人は、ベッドの中の男に言って、その豊満な肢体をネグリジェに包んで、寝室から電話の所へ行った。やがて戻ってきた彼女は、男にウインクしながら言った。

「夫からよ。会社の残業がさっき終わったんですけど」、「それなら、僕はそろそろ引き揚げるとするか」、「その必要はないわ」、

モンロー婦人は男に寄りかかって、笑みを浮かべながら、耳元にささやくように言った。

「夫はね、もう電車がいないからあなたの家へ電話したんですって」、「なんだって!」、

狼狽する男に、彼女は笑いながら続けた。

「そしたら、なんでも、あなたが今夜は泊まっていけど誘ったそうで、夫はお言葉に甘えるそうよ」

…… お後は良いようで

(次ページに写真があります)

日本のようなボックス型の公衆電話は見たことがありません。



時には、電話で語らず直接的に、このような形の愛の囁き風景も見られます



・・・送受話器、電話機もいろいろなものが仲良く同居

